

アムスルだより

No.25 1997年 5月10日

Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所

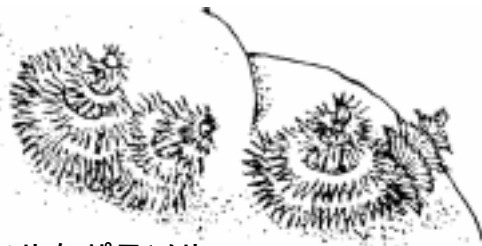


〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

TEL:098-987-2304

FAX:098-987-2875

アムスルとは、阿嘉島臨海研究所のニックネームです



カラフルなパラソル

-イバラカンザシ-

梅雨の時季は雨が多く、空もどんよりと灰色で何となく気分が沈みがちになります。町に出てビルの窓から地上を見おろせば、色とりどりのパラソルがまるでパステルカラーの輪舞を踊っているようで楽しくさえあります。地上を見下ろすのはなかなか大変ですが、海面に浮くだけで、これと似た光景を簡単に見ることができます。というわけで今回は、サンゴや岩の上に開いたカラフルなパラソル、イバラカンザシについてお話ししましょう。

イバラカンザシは、らせん状の突起を2つもっており、この形がモミの木に似ていることからクリスマスツリーワームなどと呼ばれています。また、その色彩は変化に富み、赤や青や黄色、オレンジ色などさまざま、そのカラフルな様子からの連想でしょうか、トロピカルワームという名前ももっています。では、この突起はどんな役割を果たしているのでしょうか。

この突起の正式な名前は鰓冠(さいかん)と言います。“鰓”というのは

エラのことですから、この突起は、冠の形をしたエラということになります。イバラカンザシは、この鰓冠を使って呼吸をしているのです。そして、この鰓冠には、もう1つ、餌を捕るという大切な役割があります。鰓冠の表面にはたくさんの細かな毛が生えていて、これを使って水中のプランクトンなどを口へと運び、食べているのです。

イバラカンザシは、よく釣りの餌に使われるゴカイの仲間です。ゴカイは広い意味ではミミズの仲間に入ります。イバラカンザシの美しい鰓冠の下には、ミミズのような柔らかい体があるのですが、そのままでは魚たちの格好の餌となってしまうでしょう。そこで、イバラカンザシは、その体を自分で作った石灰質の管の中に入れ、入り口以外はサンゴなどの中に埋もれています。おまけに管の入り口を閉めるための蓋まで備えているという念のいれようで、危険を感じたときは管の中に引っ込んで蓋を閉めてしまえば、もう襲われる心配はありません。実際イバラカンザシはとても臆病で、ちょっとでも触れようものなら、その美しい鰓冠ごとすぐに管の中に隠れてしまいます。

イバラカンザシは、岩の上でも見かけることができますが、阿嘉島の周辺

では、生きたハマサンゴの上にすむことが圧倒的に多いようです。先日クシバルでおこなった観察では、直径 3m ほどの半球状のハマサンゴの表面に、なんと 210 個体ものイバラカンザシが生息していました。

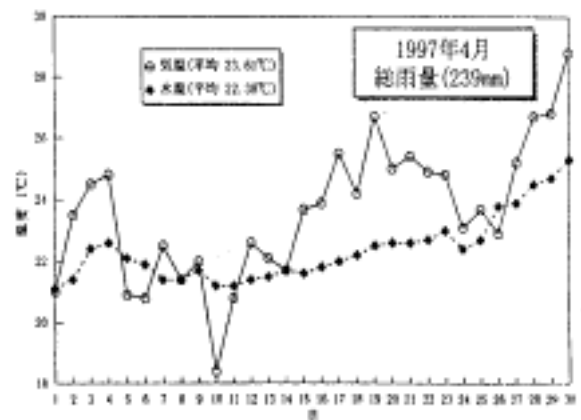
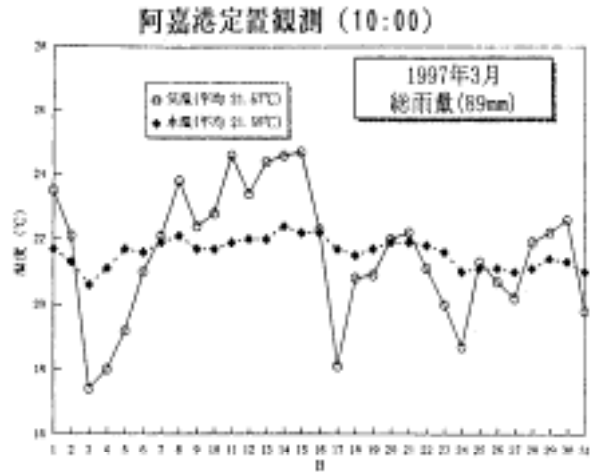
このようにイバラカンザシはサンゴに埋もれて安全を守られています。サンゴは何か利益を得ているのでしょうか？サンゴの天敵として有名なのはオニヒトデですが、ある外国の研究者によると、イバラカンザシのすむ周囲のサンゴだけは、オニヒトデに食べられずに残るそうです。この残った部分からサンゴが再生することができるならば、サンゴはイバラカンザシの存在によってオニヒトデによる死滅から護られていると言えるでしょう。

イバラカンザシが死ぬと、あとには空の管が残りますが、この管には、カンザシヤドカリというヤドカリの仲間やテングロスジギンポという細長い魚が住みつくことがあります。死して住み家を残す、なんて粋な生き方なのでしょう。

阿嘉島の海より

-サンゴの産卵観察会-

4月中旬から水温がどんどん上がり、すでに 25 を越えました。今年もまたサンゴの産卵の季節を迎えます。今年のみドリイシの産卵は、5月と6月の満月前後に分かれておこるものと予想されます。卵の成熟はまだ十分ではありませんが、この調子で水温が上がれば、5月22日の満月から数日後には大規模な産卵が見られることでしょう。



今年も、阿嘉小学校の子供たちと一緒にサンゴの産卵観察会を行います。旧阿嘉港のさん橋で、5月26日の午後6時ごろから、産卵するまで毎日観察しますので、一般の方もお気軽にのぞいてみて下さい。去年は雨のため水槽での観察だけでしたが、今年は海でも観察できるといいですね。

サンゴの産卵を迎え、研究所ではいろいろな実験準備をしています。今年は、コンクリートブロックに素焼きのタイルを固定して、阿嘉島や屋嘉比島周辺の海底に沈めています。これは、産まれたサンゴの幼生がどこにどれだけくっついて、新しいサンゴになるのかを調べるためのものです。大切な実験ですので、見つけても手を触れないようにお願いします。